PBeM『VOiCE』第１回リアクション
01-C　太陽は燃えているか

●社会科見学ララバイ

大地を埋め尽くすように設置された、ソーラーアレイ群。それは、ふたつの丘に限らず、他の街でも郊外へ行けばどこでも見られる、いわばありふれた光景だ。

空から街を見下ろせば、ソーラーアレイがびっしりと敷設され、その隙間を縫うように発電所の人間が歩く様子が見えるだろう。

海へ行けば、風力発電施設が崖にずらりと並んでいる。その合間からは、複数の街が合同で進めている洋上水素製造工場の工事風景もうっすら見えた。

街に住む人々は、日頃から発電所の存在を意識せざるをえない。安定供給されているとはいえ、自然エネルギーによる発電にはどうしても限界がある。天気が悪ければ発電量は減り、風が吹かなければプロペラは回らない。だが、それが「普通」なのだから、疑問も不満も生じることはない。電気は湯水のごとく、自由に使えるものではないのだ。自らの生活を支えるものには、限界があるということ。学校で毎年行われる社会科見学は、それを学ばせるためでもあった。

だが、実際に子どもたちを連れて行く教師の前では、社会科見学の社会的意義は霞んでいく。元気のあり余る子どもたちを引率するのは、口で言うほど簡単なことではない。ましてや、そろそろおとなしく大人の言うことを聞くような年頃ではないのなら、なおさらだ。

「今年はどうなるかな……」

ローマン・ジェフリーズは、職員室で社会科見学の進行表を眺めながら呟く。クラスの子どもたちの顔を、ひとりひとりを思い浮かべながら。

●名付け親様の通り道

朝起きて、親が食卓にいたためしがない。幼い頃はあったかもしれないが、記憶にはない。用意された食事を温めもせず、胃に流しこむように機械的に食べて、ひとりで学校に行く。それが、ニアシュタイナー・シュトライヒリングの日常だった。

最近は、特に仕事が忙しいのか、父は休日でも出勤していく。一度、母の個人タブレットに入っている緊急連絡用アプリをアンインストールしてみたが、ばれてしまって、ひどく叱られた。それ以来、両親はニアシュタイナーの前で決して自分のタブレットを手放さない。

今朝も、父は娘が寝ているうちに病院へ行ってしまったらしい。おはようの挨拶を最後に交わしたのはいつだろうか。もうそろそろ思い出せなくなってきている。

学校へ向かう道すがら、わいわいと話しながら歩いているクラスメートたちを見かけたが、挨拶もせずにその横を早足で通り抜けていく。

「あっ、ニア！　朝会ったら、おはようって言う！　そういうの、よくないゾ！」

気づいたクラスメート――陳宝花がそう言って、大声で追いかけてくるが、振り返るのも面倒だ。

子どもが嫌いだ。大人も嫌いだ。みんな嫌いだ。でも、一番嫌いなのは――

ニアシュタイナーは、無言で歩き続ける。追いかけるのをためらうような、ゆるぎのない早足で。

一方、ニアシュタイナーに避けられた宝花は、おかげですっかり機嫌が悪い。席替えで隣になったばかりの片岡春希を相手に、まくし立てている。

「挨拶しないのはよくない！　ニアはそういうところ直さないと、絶対ソンする！　春希もそう思うよネ？」

身振り手振りを交えて憤る宝花の、ぶんぶん振り回される三つ編みも控えめに避けながら、春希は頷く。

「うん、そうだねぇ……ニアちゃん、なんか怖い感じがするし……」

春希にとって、ニアシュタイナーは明らかに「苦手」の部類に入る存在だった。だって怖い。なんとなく。

「おはよう、メンマ、草食系」

「言っておくけどネ、メンマって呼ぶ限り、宝花は返事をしないゾ」

実に堂々とした態度で挨拶してきたクラウディオ・トーレスに、宝花は胸を張って宣言する。

「言っている意味がよく分からないな。草食系、分かるか？」

「あの、ごめんね、草食系って何？」

クラウディオは呆れたといわんばかりに、大げさに肩をすくめて嘆いてみせる。

「今、この俺の目の前にいるのが、草食系でないなら、いったい誰だというんだ？」

「え、うん、誰だろう……？」

「まったく……ああ、魔女もいたのか。おはよう、魔女」

魔女と呼ばれたジャンヌ・ツェペリは首をかしげて、くすくす笑う。その仕草は、十歳とは思えないコケティッシュな魅力に満ちていた。

「その名前で呼ばれるの、意外と悪い気はしないかも」

「いいや、悪いゾ。ジャンヌにはジャンヌっていう、ちゃんとした名前が……」

「メンマ、そうやっていちいち人の感性に難癖をつけるのは

良くないな。魔女は魔女、メンマはメンマ、草食系は草食系。みんな違って、みんないい」

クラウディオがどこかで聞いたようなことを言いながら、哀れむように頭を振る。

「宝花は宝花ッ！　メンマは食べ物ッ！」

春希はおろおろしながら、その光景を見守るしかなかった――ああ、早くチャイムが鳴って、先生が来ますように。

●小さな小さな賢人

宝花には計画があった。毎年四月に開催される自由研究発表会は、学校の子どもたちが常に頭を悩ませる、厄介な行事だ。調べたいことを自由にやってよいと言われても、かえって悩んでしまう。しかも、放課後という貴重な時間を勉強なんかにとられてしまうのは、もったいない。だから宝花は考えたのだ――社会科見学を活用してしまえばいい、と。そして、一人でやるよりも、複数でやった方が楽だろう、とも。

「ライサも、春希も、自由研究発表会は何するのか、決めたノ？」

「え？　自由研究発表会って四月じゃないの。まだ先の話じゃない」

三時間目の休み時間、そろそろ今日の給食は何かな、と気になりだす頃に、突然三ヶ月近く先の話をされて、ライサ・チュルコヴァは面食らった。

「先の話なんて言ってると、あっという間に来ちゃうゾ。毎年そういうものだシ」

「うーん、まあ言われてみればその通りなんだけど」

「宝花ちゃんは、もう決めたの？」

春希の問いに、宝花は応えた。

「うん。社会科見学を自由研究にしちゃおうと思ってるんダ。『電気の種類と使い方』って感じでやれば、社会科見学で見てきたことが使えるしネ！」

「あー、なるほどね」

ライサが感心したように頷く。

「というわけで、二人も参加してくれると助かるんだけド。グループ発表にすればいいんだシ」

「うん、僕は別に構わないよ。電気のことは調べたいし……ライサちゃんは？」

「別にいいけど……何にも思いつかなかったら、混ぜてもらうかも」

「じゃあ、春希は決まりネ！　今日の放課後にでも、ウチのお店へ来て作戦会議！」

そして、くるりと後ろを振り返り、目当ての人物のもとへつかつかと歩み寄ると、指を突きつけながら言う。

「ニアも！」

「……は？」

窓の外を眺めていたニアシュタイナーが宝花を見上げ、気だるげに聞き返した。

「何の話？」

「宝花の話、聞いてなかったノ!?」

「聞いてるわけないだろう」

本当は聞いていた――正確には、声が大きくて聞こえていた――ことなどおくびにも出さず、ため息混じりに冷たく言うニアシュタイナーだったが、めげずに宝花は続ける。

「ニアもグループ発表だからネ！」

「だから何の話なんだ、これは」

ニアシュタイナーが、宝花ではなく、その後ろでおろおろしている春希に問い返す。春希は答えようと口を開いたが、蛇に睨まれた蛙のような状態で、とっさに言葉が出てこない。

「あー、うー、えっと……」

その時チャイムが鳴り、うやむやかつ、妙にピリピリした空気のまま、四時間目が始まったのだった。

●委員長様に叱られるから

社会科見学の日は、いつも晴れている。そもそも気候的に悪天候である日が少ないのもあるが、伝統的に晴れる確率が高い日に実施することになっているのだ。

今年も天気予報では晴天に恵まれるようだ。子どもたちは「これがスポーツ大会の日だったらな」とこぼしながらも、明日のことで盛り上がっている。発電所までの移動は徒歩でなく、自動車で行う。めったに見かけることのない大型自動車に乗れるとあっては、本来の目的そっちのけになってしまうのも無理はなかった。白鐘鈴香もその一人だった。

「クルマって酔うんだってさ。おばあちゃんが言ってた」

帰り支度をしながら、今朝、祖母がふと言っていたことを話すと、隣の席の走馬灯が鈴香に聞き返した。

「酔うって何？」

「さあ？　気分が悪くなるとは言ってたけど」

「ふーん。なら気分が悪くなるって言えばいいのにね。大人って変なのー」

「でもさ、クルマに酔うってどんな感じなのかな？」

ジャンゴ・リーボリックが、黒い瞳を輝かせながら、興味津々に尋ねてくる。

「うーん、そこまでは聞かなかったなぁ。今日聞いておこうか？」

「ほんと？　やったぁ！」

「うん、別にいい、」

いつもに増してざわつく教室が、突然の音に一瞬静まり返ったのは、鈴香がそう返したのとほぼ同時だった。

見れば、御手留乃歌が持っていた鞄を思い切り教卓に

叩きつけたらしい。勢い余って、タブレットのペンケースが転がっていくのを、柳瀬小唄がそっと拾い上げて、留乃歌の手元に戻した。
「え、何?」
　ルーチェ・ナーゾがあっけに取られたように、留乃歌を見やる。留乃歌は、その目線を真正面から受けて立つと、大声で言った。
「いいこと?　明日の社会科見学は、**くれぐれも発電所の人たちに迷惑をかけないように!**　分かった!?」
　そう言うと、ぎろりとクラスメート一同を、確認するように見回す。春希は気圧(けお)されたように何度も頷き、ニアシュタイナーはつまらなそうに外を眺めている。
「急に何を言い出すかと思えば……まあ、委員長らしいといえば、らしいか」
　クラウディオが肩をすくめる。
「いたずらとかしちゃダメだからね、絶対!　そういうことをする人は、私が――」
　教卓を拳で叩くと、留乃歌は厳(おごそ)かに言った。
「力づくでも、止めます」
　黄金色から赤へと移り変わっていく夕日を受けて、留乃歌のハニーブロンドと、橙色(だいだい)のフレームの眼鏡が光る。レンズ越しの瞳は暴力的なまでの真摯(しんし)さをたたえていた。

「なんだよなぁ、あいつ……」
　ぼそぼそと、ルーチェが毒づきながら、タブレットを操る。
<あいつ、おっぱいないからさ、心が狭いんだよ。おっぱいの大きさは女の心の広さだって、父ちゃんが言ってた>
<ちょっといいかな>
　クラスメートに悟られないように、さり気なくタブレットを隠しながら、鈴香は男子たちに限定して、シークレットメッセージを送った。
<明日の社会科見学で、発電するところに忍び込んじゃおうぜ!>
<マジかよ……委員長がさっき言ったばっかじゃん>
<や、やめようよ、そういうの……>
<だからこそだよ。委員長からのセンセンフコクだ。受けて立ってやろう>
<うわー、すげぇな鈴香!>
<ボクも探検したいって思ってるんだ>
<明日、一番スゴイことをやった奴が、このクラスのナンバーワンだ!>
<アレだろ、番長っていうんだろ、そういうの>
<よーし、番長競争な!>

　結果的に留乃歌の宣言は、一部の子どもたちの闘争心に火をつけた形になった。

● Locked Girl

　留乃歌の宣言にざわつく教室を後にし、水無月千鳥は図書室へ向かっていた。それというのも、ライサが教室を出ていくのを見かけたからだ。放課後、ライサはいつもひとりで帰る。その前に、ほぼ必ず図書室へ寄るのだ。
　少し早足で歩いて行くライサに追いつこうと、千鳥は小走りになる。健康的な黒いおかっぱの髪が揺れて、廊下に伸びる影も一緒に揺れた。追いついた途端、千鳥は後ろからライサに抱きついた。
「ねえねえ、教えてー?」
「はわ!?」
　千鳥が小走りだったため、後ろから飛びつかれるような形になり、ライサの声と体がつんのめる。
「な、なに?　……って、千鳥か。びっくりさせないで」
　おかっぱの髪をぐしゃぐしゃと撫(な)でながら、ライサは言った。
「教えてって、こっちが聞きたいわよ。いったい何?」
「ライサちゃんのおすすめの本。読んでみたいなって思って」
「ああ、別にいいわよ。一冊返しに行くところだし」
　そうして、千鳥とライサは連れ立って図書室へ向かった。迷わず「社会・政治の読み物(初等教育クラス向け)」と書かれた棚へ千鳥を案内し、ライサはデータタイトルを物色し始める。本棚といっても、そこに本が入っているわけではない。本のタイトルと著書、そして簡単なあらすじや内容が表示されたパッケージが並んでいるだけだ。書籍はすべてデータである。貸出とは呼んでいるが、実際には有効期限が過ぎるとリーダーで読み込めなくなる仕様だ。それでも、本という名や本棚といったものが消滅しなかったのは、「本」という表現の形に対する一種のノスタルジーなのかもしれない。
「ライサちゃんは、社会科見学は嫌い?」
「え、なんで?」
「だって、ほら、ライサちゃん、寂(さび)しそうな顔してたよね?」
「は?　いつ?」
「メッセージラインで、社会科見学の話をしてた時。なんかその、気になったの。だから。ごめんね」
「ああ……そんな顔してた?」
「してたよ」
　千鳥がなぜか力いっぱいに頷く。
「ふぅん……別に、大した理由なんてないわ」
「嘘」
「言い切るわねぇ」
　ライサが思わず苦笑する。ナチュラルかつ、何も隠そう

としないストレートな千鳥の聞き方に、ライサはふと、妹でもいたらこんな感じかもしれない、と思った。
「理由っていうほどの理由はないわ。ただ……」
「ただ？」
「……ただ、みんなの輪の中に入る気にならないだけ。そういう時ってあるでしょ、千鳥にも」

●歌色小径

社会科見学の楽しみは、自動車だけではない。普段は決して持ち込んではいけないお菓子を、正々堂々と持ってこれる日でもある。金額は制限されているとはいえ、その中で最大限にやりくりするのも、楽しみのひとつだ。

佐久間花音は、借りていた本を返しに、図書室へ向かっていた。ドアを開けると、司書のヴィヴィアン・フェイが机の上の花瓶に花を活けているところだった。
「こんにちは、ヴィヴィアン先生」

ぺこりとお辞儀をすると、ふと思いついたような雰囲気を装って、ヴィヴィアンに尋ねた。
「そうだわ、ライサちゃんはもう帰りましたか？」
「初等教育クラスの子ですね。ええ、まだいますわよ。ほら、あちらに」

そう言って、ヴィヴィアンが指し示す方を見ると、ライサが千鳥に書籍データを選んでやっているところだった。
「ありがとうございます、先生」

会釈(えしゃく)をして、あまり足音を立てないように、静かにライサたちのところへ向かう。
「ライサちゃん、千鳥ちゃん、何しているの？」
「これね、わたし借りるんだぁ」

花音が話しかけると、振り向いた千鳥が不意に抱きついてきた。唐突なスキンシップだが、千鳥を知っている者には、これはもう日常茶飯事である。
「そう、それは良かったわ」
「うん！　あ、それでね、わたし、ライサちゃんにおすすめの本を教えてもらおうと思って」

行動と、理由や説明の順番がひっくり返りがちなのが、千鳥の癖だった。
「そうなの、どれを借りるか決まった？」
「うん！　これ、『わたしたちの社会のしくみ　上巻』っていうの。花音ちゃんも、本を借りに来たの？」
「ううん、花音はお誘いに来たの。良かったら、これから社会科見学のお菓子を買いに行かない？」

そう言って、花音はライサを見やる。ライサは、千鳥を見る。花音とライサを見つめる千鳥の目は、お菓子への情熱で輝いている。
「……断ったら、泣かれそうだわ」
「え？」
「なんでもないわ、こっちの話。いいわよ、千鳥も来るでしょ？」
「うん！」

満面の笑みで頷くと、お菓子♪と歌いながら、千鳥は本の貸出手続に走っていった。

「わあ、これ可愛い！」

千鳥が無邪気な歓声を上げる。放課後のティベリス通りは、お小遣いで買い食いや買い物を楽しむ子どもたちで賑やかだ。その中の一軒、アビントン・スウィーツ&キャンディは、花音がよく行く店でもあった。扱っているのは子どもが気兼ねなく買えるお菓子だけでなく、ちょっと気の利いたお持たせにも使えそうなケーキやクッキーもある――さすがに、天然の卵やクリームを使ったものとなると、予約しないと買えないが。

店主から渡されたリボンつきの小さなカゴに、選んだお菓子を入れては戻し、戻しては入れる。制限額と自分の食べたいものとを天秤にかけながら、少女たちはお菓子を真剣に吟味(ぎんみ)する。
「そういえば、ライサちゃんはキルシ先生のお見舞い、どうするの？」

花音の問いに、ライサはお菓子を選ぼうとしていた手を止めて、考えこむ。
「ダメとは言われてないし、行きたいわ。でも、勝手に行くのもどうかなって思って」
「そうよね……。もし行けたら、プレゼントって何がいいかしらね」
「そうねー。やっぱりお花とかじゃない？　食べ物とかは、病院だと怒られるかもしれないし、難しいかもね」
「そうだわ、みんなで歌うってどうかしら？」
「歌？　どこで？」
「先生の病室で。花音はママやパパと一緒に、ときどきお姉ちゃんたちの歌を聞きに行くんだけど、とっても素敵だもの。きっとみんなで歌ったら、先生も元気になってくれるわ」
「……まあ、実際にできたら素敵よね」
「でしょう？」

花音がにこにこ微笑(ほほえ)むのを見て、ライサはゆるく笑って、お菓子選びを再開した。

「やあ、ニア。何をしているんだ？」
「な、何って何をだ！」
「聞いたのはこちらなんだが……」

学校帰りに、ふらりとティベリス通りへやってきたクラウ

ディオが、たまたま前を歩いていたニアシュタイナーに気づいて声をかけると、必要以上に驚かれた——驚かれるような要素は、クラウディオには思いつかないが。
「……クラウディオには関係のないことだ」
「ニアもお菓子を買いに来たのか？」
「知るか」
　あまりに脈絡のない別れの言葉に、クラウディオは呆気（あっけ）に取られたまま、ずかずかと歩いて行くニアシュタイナーの背を見つめるのだった。

●君はあの子を見たか

　例年通り、晴天に恵まれた社会科見学当日。学校前に停められた大型自動車に乗り込むため、子どもたちは列を作っている。もちろん、おとなしく並んでいるわけがない。にぎやかな会話だけでなく、メッセージライン上でも騒がしく言葉が行き交う。
　その間を泳ぐように、ローマンは担任するクラスの子どもたちの点呼を行なっていた。名前を呼ばれると、目を輝かせながら返事をする子どもたちの頭を撫でながら、ひとりひとり確認していく。
「次、平谷杏樹」
　ローマンの点呼に、返ってくる声はなかった。
「……杏樹？　杏樹はどうした？　知っているかい？」
　近くにいた留乃歌にローマンが問うが、留乃歌は首を横に振ることしかできない。
「あれ？　誰か、杏樹を見かけなかったか？」
　教師の狼狽（ろうばい）を感じ取ってか、にわかにざわめきだす子どもたちを制しながら、ローマンは職員室へ走った。
　学校には欠席の連絡は行っていないどころか、家族はいつもどおりに家を出たと言う。職員室は、一気に緊迫した空気に包まれた。
　子どもたちにこのことを伝えるべきか、ローマンは考えた——答えは、ノー。ローマンをはじめとする教師たちと、校長は最終的にそう判断した。子どもたちの不安を不用意に煽（あお）るべきではない。今はまだ、その時ではない——「その時」が来ないことを祈りながら、ローマンはいつもどおりに子どもたちに声をかける。
「さあ、みんな。残念だけど、杏樹は今日はお休みだ。杏樹の分まで、きちんと勉強してこよう」

　夕方、いつもどおりに家へ帰った杏樹が、両親から質問攻めと説教ののち、キルシ・サロコスキのお見舞いに行っていたことが分かるまで、ローマンは緊急連絡用のスマートフォンをずっと握りしめていた。

●年中無休の好奇心

　杏樹は休みだというローマンの言葉を疑う余地もない子どもたちは、初めて乗る自動車に興奮の色を隠せなかった。当然ながら、歩くよりも、自転車よりも早い。見慣れた風景があっという間に遠くなっていく。歩いてきたら、ここまで来るのにどれくらいの時間がかかるだろう？
　ジャンゴはずっと窓の外を見ている。世界がどんどん動いていく。このまま、自分が知らない遠いところまで、あっという間に行けそうな気がする。もっと遠くへ、知らないところへ——ジャンゴの心は、発電所をはるかに越えて、まだ見ぬ世界まで飛んでいた。

　社会科見学は、太陽光発電所と風力発電所の二箇所を見学する。去年は施設内でレクチャーを受けたあと、小さな太陽電池を使った発電実験をしたが、今年は実際に稼働中のソーラーアレイ群を見学することになっている。とはいえ、重要施設に指定されているため、内部に入ることはさすがにできず、遠巻きに眺めるだけだ。
「ここでは、毎日太陽の光を使って、電気を作っています」
　子どもたちの前で説明する発電所の職員は、おそらく広報担当なのだろう、緊張することもなく、手馴れた様子で話している。
「この大きな機械は、ソーラーアレイといって、いくつかの太陽電池を組み合わせてできています」
　宝花や灯は、真面目にメモアプリを起動してメモを取っている。クラスメートの中には、そのメモをあてにしている者もいるだろう。
「太陽電池は、太陽の光が必要なので、当然夜は電気を作ることができません。そのため、ソーラーアレイは主に昼間使う電力を作る仕事をしています。余剰、じゃなくて余った場合、常に蓄電……えぇと、貯めておいています。もうひとつ、海に作られた風力発電は、風が吹いている限りは発電できるので、だいたい一日中動いています。えー、ここまでで何か聞きたいことはありますか？」
　その言葉に、さっと手を上げたのが灯だ。
「ぼ……私は、走馬灯といいます。えっと、質問です。ふたつの丘で、太陽と風以外に、電気を作る方法はありますか？」
　灯の質問に対して、広報担当の隣に立っていた黒髪の技師がどこか嬉しそうに答える。
「今はまだ作っている途中だけど、もうすぐ太陽でも風でもないものを使って電気を作れるようになります。あと三ヶ月くらいかな」
　技師の答えに、灯は首をかしげた。
「それって、何ですか？」
「もう学校では習ったかな……水素って聞いたことがあるか

い？　今、いくつかの街が協力して、水素を使った発電所を作っているんだ。水素を作る工場も合わせてね」

技師の説明を聞きながら、小唄は隣に座っている春希に小声で話しかけた。

「なんだかよくわからないけど、すごい話ね」

「うん、そうでしょ。すごいんだ」

対する春希はどことなく嬉しそうだ。そして、小唄よりさらに声を潜めて囁くように言った。

「えへへ。あそこにいるの、僕のお父さんなんだ。水素発電の仕事は、お父さんがやってるんだ」

その目は父親に対する尊敬と誇りに満ちていて、小唄にはそれがひどく羨ましく思えた。

次に質問の手を上げたのは、ニアシュタイナーだった。

「ニアシュタイナー・シュトライヒリングです。停電が多いけど、それは水素発電ができるようになったらなくなりますか」

質問というより、詰問に近い口調だったが、技師――春希の父、片岡音彦はにこやかに答える。

「そうだね、水素発電ができるようになれば、今よりも停電は少なくなるか、ほとんど起きなくなるか、どちらかだと考えています」

「どうして、停電は起こるんですか？」

灯がニアシュタイナーの後に続けて手を上げた。音彦は、少し困ったような顔をしつつ、その質問にも答えた。

「うーん……原因はひとつだけではなくて、いくつかの要素が重なり合っているというか……。このへんはちょっと複雑なんだけど、みんなが使う電気の量が、その時作れる電気の量を上回ってしまったら、当然足りなくなる。足りなくなれば、停電してしまう。つまり、作れる電気の量が少ない時があって、それに加えて使う電気が増えることがあって……あとは送電がねぇ……うーん、なんといったらいいか……」

十歳の子どもに理解できるように言葉を選ぼうとすると、結局何も答えていないような状態になってしまう。音彦は、困ったなぁと、息子そっくりの表情でニアシュタイナーの厳しい視線を受け止めていた。

●太陽親父とイタズラ少女

灯とニアシュタイナーが質問している頃、鈴香は言いようのない達成感に満ちていた。説明会場をそっと抜け出し、ソーラーアレイ群の近くまでやってくるのは、なかなか容易ではなかった。発電所に普段子どもはいない。非常に目立つ存在だ。だからこそ今、鈴香は、勝利の美酒をたたえた盃を掲げるように、水溶クレヨンの箱をそっとバッグから取り出した。まったく、男子どもは口先ばかりでだらしがない。特に、説明会をサボろうとしてあっさり見つかってしまったルーチェの不甲斐なさを心中でぼやきつつ、中から赤いクレヨンを取る。

ソーラーアレイ管理・監視用に建てられている計測ルームの、すぐ横にある小さな職員専用の電子掲示板。そこに、鈴香はそっと、だがしっかりとクレヨンをつけようとして――

「何をしているのかな？」

「……何しているように見える？」

「うーん。なんだろうね。そうだな、落書き、かな。正解？」

「……正解」

「じゃあ、正解者には豪華なプレゼントをくれなくちゃね。豪華プレゼント、それは君の名前だ。君はなんていうのかな？」

●ほおずきみたいに紅いお茶

「お昼のお弁当を食べたら、次は風力発電所へ移動するよ。おやつは、見学が終わったら食べていいからね」

ローマンの声に、子どもたちはわっと歓声を上げ、元気よく返事をする――もちろん、見学が終わるまでお菓子を我慢する気はないけれど。

手に持ったスマートフォンには、まだ何の連絡も来ない。ため息をつきかけた瞬間、ローマンは肩を叩かれた。

「ちょっといいですかね、先生」

にこやかな表情の初老の男性と、その横には手首を掴まれて、バツの悪そうな顔をした少女がひとり――鈴香だ。

「えっと……どうされました？　うちの生徒が何か……？」

「いやはや、元気のいいお子さんばかりで大変ですなぁ！ ははは、いや何、現行犯逮捕ってやつですね。いや、未遂か」

「は、はあ……」

ローマンは、男性と鈴香の顔を交互に見やる。男性の胸には、役職と名前を示すネームプレートがついていた――ふたつの丘第一太陽光発電所　所長　リーンハルト・エルメンライヒ。

鈴香は思った。

――なんで、所長なんて偉い奴が、ふらふら散歩なんかしてるんだよ！

なぜかローマン以上に鈴香を叱りつけている留乃歌を横目に、小唄はライサの横にちょこんと座った。

「ライサさん、お弁当交換しない？」

「ん、いいけど」

ライサのお弁当は、シンプルなサンドイッチと温野菜サラダ、そして温かい紅茶だった。小唄は祖母が作った卵焼きを、ライサはトマトドレッシングがかかったカリフラワーを交換した。

「あ、あとこれ、内緒(ないしょ)であげる。ぼく、このお菓子好きなの」
　そう言って、甘辛さと安さが人気の、薄い合成駄菓子をそっと差し出す。ライサは嬉しそうに笑った。
「ありがとう、じゃああとで私のお菓子もあげる。昨日、千鳥や花音と一緒にマカロン買ったの」
「そういえば、さっき説明してくれてたおじさん。あの人、春希くんのお父さんなんだって」
「ふうん……そうなんだ」
　気のない返事をしながら、ライサは紅茶に息を吹きかける。その様子を見て、小唄は思った――やっぱり、そうだ。
「ねえ、ライサさん」
「何？　あ、卵焼き美味(おい)しかった。ありがと」
「うん、おばあちゃんに言っておくね。……あのね、気に触ったら、ごめんなさい」
「え、わたし卵焼き好きよ。嫌いじゃないから、小唄が謝ることないわよ？」
「そうじゃなくて……ライサさん、なんだか楽しそうじゃないなって、そう思って」
　少し勇気を出して、小唄は言ってみた。ライサはなんだか楽しくなさそうだ――小唄は、そう感じる。何が楽しくないのか、なぜ楽しくなさそうなのか、小唄にはそれが分からない。みんなでおしゃべりしている時のライサは笑っているし、他の子と変わらない。だが、ふと気がつくと盛り上がっている人の輪の中から消えていることがある。メッセージラインにも、めったに発言しない。放課後も、誰とも遊ばずにさっさと帰ってしまう。もしかして、みんなが嫌いなんだろうか、と小唄は少し心配になる。ぼくも嫌われてしまっているんだろうか？
「ぼくもメッセージラインで文字を追いかけるのって、ちょっと苦手で……みんな、書くのがとっても速いから、追いつけなくて。でも読むのは楽しいんです。みんなのおしゃべりを聞いてるみたいで、楽しい。ライサさんは、どう？」
「どうって言われても……まあ、眺めてるのはそれなりに楽しいわね」
　ライサはそう言って紅茶を一口するするが、まだ熱かったのか、すぐコップから口を離した。

●海より碧い夢

　潮騒の音は、プロペラが回る音にも負けず、ジャンゴの耳に心地よく響いてくる。
　海にはめったに来ない。行く理由がないからだ。砂浜でもあれば、海水浴でも楽しめただろうが、あいにくふたつの丘にあるのは、切り立った崖だけだ。見上げれば、そこには大きな白いプロペラが悠然と回っている。あの回転が電気を生み出すだなんて、小さい頃からさんざん学校で習ったものの、やはり不思議だ。ただゆるやかに、風を受けて回っているだけにしか見えないのに。

　昼食のあと、子どもたちは海の近くにある風力発電所までやってきた。鈴香とルーチェは今度こそ、と意気込んでいるようだったが、留乃歌の監視は午前中に比べてはるかに厳しくなっている。
　午後の説明は、施設内ではなく風力発電のプロペラ近くで行われることになっている。自動車から下りた子どもたちは、ローマンや他の教師たちに連れられて歩いて行った。潮の香りが、子どもたちの鼻をくすぐる。
　ジャンゴがそっと列を離れていったのも、あるいはその潮の香りに誘われたのかもしれない。
「先生、あれは何ー？」
「先生、お菓子食べちゃだめ？」
「喉乾いたー」
「ちょっとスカートめくらないでよっ HENTAI!!」
　教師たちが騒がしい子どもたちに気を取られている隙に、ジャンゴはまっすぐに施設の奥を目指していった。

　いくつかの白い建物の横を通りすぎ、小高い丘を越えていくと、やがて潮騒の音が聞こえてくる。ジャンゴの身長の三倍はあるだろうか、高い柵の向こうには、海が広がっていた。沖合では、何か大きな施設の建造工事が行われているようだ。よく目をこらせば、海の中にも白いプロペラが何本も立っている。風は穏やかに、ジャンゴの髪を揺らしていく。強すぎる風は風力発電の敵だが、ふたつの丘の風は、風力発電の味方のようだ。
　いつか、ふたつの丘どころか、海も空も越えて、ボクは見知らぬ土地へ行けるだろうか――遠く行き交う船を見ながら、ジャンゴは未来に思いを馳(は)せた。

「どこへ行ったかと思えば、こんなところにいたのね、ジャンゴくん」
　突然声をかけられて、ジャンゴの心臓が飛び跳ねた。
「そ、その声は……委員長？」
　意を決して振り向くと、そこにはハニーブロンドの三つ編みと橙色のフレームの眼鏡――委員長こと、留乃歌だった。
「きっ、奇遇だね、こんなところで会うなんて？」
　先日の留乃歌の宣言を思い出し、ジャンゴは思わず後ずさりをする。しかし背はすぐに柵へ当たり、逃げ場はもうないのだと思い知らされるだけだった。
「本当ね、運命だって感じちゃうわ」
　一歩、留乃歌がジャンゴへ歩み寄る。また、一歩。逃げ場はない。先ほどまであんなに優しくジャンゴを包んで

くれていた潮騒も、風も、今では素知らぬ顔だ。
「ねえ、どうしてこんなところにいるのかしら？　今日って社会科見学よね？　私たち、勉強しにここへ来たのよね？」
　いつだったか、従兄弟（いとこ）とやったゲームを思い出す。ああ、こうやって敵がゆっくりこちらへ近づいてきて、手を伸ばしてくる――どうしてここにコントローラーはないんだろう？撃つべき武器がないのだろう？
「私、言ったわよね。いたずらとかしちゃダメって。そういうことをする人は――」
　一歩。また、一歩。もう目の前。
「**力づくでも、止めるって**」

「おーい、そこで何をしてるんだー」
　遠くから、呼びかけてくる声がする。そこで何をって、見てわかんないかな。もうボクは万事休すなんだよ――ジャンゴはぼんやりとそう思った、その時だった。
「お、お父さん !?」
　留乃歌が驚いたように飛び跳ねて、声を上げた。
「お父さん、どうしたの !?」
　走り寄ってきた男性に、留乃歌もまた慌（あわ）てたように駆け寄っていく。
「どうしたのって、柵近くに誰かいるなと思って見に来たんだよ。ここら一帯は、たまに人が入ってくるんだが……留乃歌こそ、どうしたんだい？　今日は社会科見学だろう？」
　ジャンゴはゆるゆると男性を見上げた。留乃歌とよく似た、ハニーブロンドが午後の陽光を浴びて輝いている。ああ、そっくりだ、とジャンゴは思った。

●六十年目の特別補習

「平谷杏樹、ジャンゴ・リーボリック、白鐘鈴香、御手留乃歌、それにルーチェ・ナーゾ。……今ここに呼ばれている理由は、分かっているね？」
　ローマンの言葉こそ疑問形ではあるが、実際には念押しに近い。社会科見学の次の日、朝から六人は職員室に呼び出された。
　職員室に並ぶ五人のうち、四人は気まずそうに下を向く。留乃歌だけは、正々堂々と正面を向いていた。
「まあ、なんだ。先生も君たちくらいのときは、あれこれいたずらをしては叱られたものだよ。今の君たちみたいにね」
　ローマンはそう言うと、深くため息をついた。
「君たちに勉強を教えることだけが、先生や学校の役目じゃない。悪いことをしたら叱る、それもまた僕らの役目だ。というわけで」
　子どもたちの手に、それぞれ五枚ずつデータカードが渡される。
「君たちのために特別に用意した、補習のデータだ。それを全部しっかりやり終えるまで、放課後、みんなと遊ぶことはできないと思ってくれ。いいね？」
　それからというもの、毎日特別教室での補習が始まった。
　授業が終わると、ローマンが五人を連れて教室から一緒に移動するため、途中で抜け出すのは至難の業だった。ジェシー・ジョーンズが探検部を結成した、その記念すべき瞬間に、ジャンゴが立ち会えなかったのも、ひとえにローマンの責任感の強さによるものである。

「今年の子は、なかなかすごいそうだね」
　空が紫色から夜の色へ変わる頃、校門から出ていく五人の子どもたちを見送るローマンに、同じように帰路につく保健医ベネディクト・ハンゼルカが言葉を投げかけた。ローマンは苦笑する。
「まあ、元気があってよろしい。……のかなぁ」

●命名は儚（はかな）き人間の為に

　朝の教室はいつでも騒がしく、そして活気に満ちている。社会科見学も無事（一部除く）終わり、クラスの関心はもっぱらキルシへのお見舞いとバレンタインに移りつつあった。
「おはよう、流れ星」
「クラウディオ、魔女ちゃん、おはよう〜」
「ねえねえ、メンマー、宿題見せてー」
「だめだヨ、ちゃんと自分でやらなきゃ！」
　気がつけば、すっかり「メンマ」と呼ばれることに慣れている――そのことに気づいて、宝花は愕然（がくぜん）とした。

登場 PC・NPC一覧

【PC】
・ジャンゴ・リーボリック
・陳宝花
・ニアシュタイナー・シュトライヒリング
・柳瀬小唄
・走馬灯
・白鐘鈴香
・佐久間花音
・御手留乃歌
・水無月千鳥
・クラウディオ・トーレス

【ちょっとだけ登場 PC】
・ジャンヌ・ツェペリ
・平谷杏樹
・ジェシー・ジョーンズ
・流れ星（※あだ名）

【NPC】
・ルーチェ・ナーゾ
・ローマン・ジェフリーズ
・片岡春希
・ライサ・チュルコヴァ
・ヴィヴィアン・フェイ

【ちょっとだけ登場 NPC】
・シュトライヒリング夫妻
・校長先生（名前はまだない）
・太陽光発電所広報担当職員（名前は特にない）
・片岡音彦
・リーンハルト・エルメンライヒ
・御手留乃歌の父
・ベネディクト・ハンゼルカ

【名前だけ出てきた系 NPC】
・キルシ・サロコスキ